

「おじさーん、これってどう使えばいいか分かる？」

「お前…それ何か分かってるのか？」

「あーやっぱり知らないんだ？ パパと違ってオナないもんねえ」

こいつは訳あって今はうちで預かっている親戚の子で
多少やんちゃだが家事も手伝ってくれる比較的良い子なんだが…



「バカ…やり方くらい分かるわ」

「じゃあやって見せてよ」

「絶対やらん」

だが従姉妹も考えてみればもう〇学生、まだ早いとは思うがこいつに彼氏がいるならこういう事も気になるものか…今は俺しかないわけだし保護者として俺が教えた方が将来のこいつの為になるか…

「…でもまあ使い方は教えておいてやる」



置いていたペンを使って実践する

「ほらこうやって根元まで付けろんだ」

「へーこの先の余ってるのそのままでもいいんだ」
「てっきり穴に入れるんだと思ってた」

「間違ってもそれやったらそいつ絶対怒るぞ…」



「はあ…もし彼氏がしなかったらお前から付けさせるんだぞ」

「はーい……♪」

不敵な笑みを浮かべる従姉妹を見て溜息がでる。
こっちはお前の世話で碌に婚活もできねえのに…



「あゝなんかもう今日は疲れたから先寝るわ…」
さっき食べた夕食で腹が膨れた所為か
俺はいつもより早く床に就いた

「そ、おやすみ
お・じ・さん♡」



「おじさーん♪

言われた通りに避妊具コンドームを付けてあげたよ♡♡♡」

「あんなあからさまに誘ったのに鈍いんだから…」

「そんなんだから彼女も

できないし婚活も失敗するんだよ♪」

「睡眠薬を盛るのも大分こなれてきたから

こんな風におじさんに跨っても全然気づかないね？」

「ふふ…じゃあ今から挿入いれるからね…♡

早く起きないと従姉妹の初めて奪っちゃうよ♡♡♡」



「挿入^{はい}ったあ——ッ♡♡♡」

ゆっくり慎重に挿入^{いれ}たお陰で痛みは軽減できたが
膣内を圧迫する肉棒の感触で少し嗚咽を漏らす

（ちよっと痛いけど…ちゃんと挿入^{はい}った…♡）

あ♡

ほ♡

す♡

「はは…♡おじさんサイテー

従姉妹の初めて奪^{うば}っちゃうなんて♡♡」

「ここまでして起きないなら…最後までしていいって事だよね♡」



「ん…ツ♥あうツ…♥♥」

何をしても起きない相手を良いことに
自分のリズムで小刻みに膣内に刺激を与える

「お♥おじさんツ…♥ここまでして起きないなんて…ん♥」



「あんツ♥どこまでも鈍感なんツ♥だからあ♥♥♥」

自分で盛った葉を傍に起きないおじさんに
苛立ちを覚えてからかう事を諦めて一心不乱に腰を振る

刺激を与えると一際大きい快感が襲う、腰が抜けそうな感覚
いつもの自慰より強い快楽を予感させる
期待感が私の理性を払いのける

落雷のような快感が襲うと同時に力強く腰を落とす

[illegible]

「はぁ♡はぁ……♡♡」

（腰……碎けて……足ヒリヒリして動けない……♡♡）

快樂の余韻を受けながら額に汗が滲んでいる
おじさんの寝顔を眺める

（結局最後まで起きなかったなあ……
ちよっとだけ期待してたのに……♡）

「明日からちよっとずつ葉減らしていこうかな……？」

（夏休みはまだあるし……ここまでしたらもうとことんやろう♡）



後日……

「えへへ…♡♡♡」

今日は出血大サービスでねこちゃんコスだよ♡♡♡」

「昨日は『起きたら恋人になるゲーム』だったけど

今日は『起きたら愛玩動物になるゲーム』に

特別に変更してあげる♡♡♡」

「だからもし起きたら『おじさん』と『従姉妹』じゃなくて

『ご主人様』と『ペット』になってね♡」



「んにやあああああゝゝゝ♡♡♡」

間抜けな喘ぎ声と共に盛大に絶頂する

（連日、おちんちんハメすぎて、ずっと気持ちイイよおゝ♡）



「うう…♡こんニャンじゃ…本当に

わたひ…ご主人様のペットになっちゃう…♡♡♡」

（早く起きてよお…もうペットでも

何でもいから♡♡一人じゃ寂しいよお…♡♡）

「もうツ…♡おじさんのばか…♡ツツ♡♡♡」